

「宗教とは？ —統一教会問題を考える—」

日本キリスト改革派教会 名古屋岩の上教会
2022年11月26日10時～12時（片平ふれあいセンター）

相馬伸郎

序

去る7月8日、安倍晋三元首相がひとりの青年によって銃撃され死亡するという衝撃的な事件が起きました。私自身は、統一教会と祖父の岸信介氏、安倍晋太郎そして安倍元首相と三代にわたる深い関係にあったことは把握していたつもりでした。私は、統一教会の別動隊である「勝共連合」と自民党とは、結託していたと考えていました。つまり自民党は、日本における共産党批判の急先鋒としてこの団体を利用して、いわゆる日本における共産党の力、左翼的言論を封殺するいわば「鉄砲玉」のように利用してきたと認識していました。

しかし、正直に申しますと、まさかここまで自分たちの団体の存続とその教えを擁護するために、国会議員、地方議員に食い込み、取り込んでいたのかについては、気づきませんでした。私自身はこれまでむしろ、市民集会やデモなどのスピーチでは、何度も「日本会議」や「神道政治連盟」という宗教的イデオロギーが自民党の国会議員、政府のほとんどのメンバーに影響力を及ぼしていることに注意を喚起してまいりました。つまり、自民党は、国家神道や神道的カルト団体に影響を受けているきわめて宗教的イデオロギーに染まっている政治団体であると批判し、その危険性を訴えて参りました。しかし、正直に申します。私は、これまで統一教会のことは一度も触れたことがなかったのであります。

I 宗教とは何か

(1) キリスト教は宗教なのか

私は今年で牧師になってから35年になります。私は、自分が宗教者であるとか宗教をしているという自覚を持たないままに歩いて参りました。なぜなら、私自身は、いわゆるキリスト教を宗教とは考えていない立場に立っている者だからです。

宗教とは考えない理由は、私自身の日本にある様々な宗教についての認識に基づきます。つまり、私たちの周りにあるさまざま宗教とは、人間が神に至ろうとする働き、人間が真理に至ろうとする営みを指すものだと考えているからです。実は、聖書によればそのような企ては、まったくお門

違い、不可能なのです。聖書が明らかにする真理とは、その正反対だからです。神ご自身が人間のために、人間の救いに向かって働いておられるその御働きのことです。ですから、人間のいわゆる宗教的営みこそ、不信仰そのものだ、偶像礼拝そのものだと、私自身は一貫してこのような立場をもって、生きて参りました。この立場はまさにキリスト教を唯一絶対の救いとする立場に立つという事になります。使徒言行録第 4 章 12 節の中で、使徒たちは「**天下にイエス・キリスト以外に救いはない**」と宣言しました。この聖書の主張を、私自身もまさに文字通り確信しているわけです。

確かに、主イエス・キリストは「**わたしは道であり真理でありいのちである**」と自己紹介されました。これは、イエスというお方は神であるという宣言です。道とは人の生きる道のことです。人間が人間らしく生きる道とはイエスさまとのかかわりが絶対に必要だと言う主張です。真理とはただ一つということです。有名なイエスさまの御言葉に「**真理はあなたがたを自由にする**」があります。国会図書館に掲げられている御言葉です。この真理とは、人間にとって絶対に必要な自由をもたらすのだということです。人間を人間たらしめるもの、人間の尊厳をあらわすものが自由です。そして、イエスさまはご自身が真理であり、イエスさまが私たちを縛り付けている罪や死という縄を紐解いて、解放してくださるという約束です。こうして最後にイエスさまが「いのち」だと宣言されました。このいのちとは、心臓が動いているという肉体のいのちのことだけを意味しているのではありません。神のいのち、それを永遠のいのちと申します。この永遠のいのちを持っておられるのが私イエスだと、自己紹介されたのです。

要するに、いわゆるキリスト教はこのイエスさまによって始まるのですから、キリスト教とは唯一絶対の教え、真理だと言うわけです。これは、皆様にとって衝撃的な自己紹介ではないでしょうか。

ただし、真理であり道であり命であると自己紹介なさった主イエスは、この真理を決して人々に押し付けることはなさいませんでした。この真理を信じさせるため、納得させるため、真理以外の方法を一切用いませんでした。つまり、イエスさまは徹底的に私たちを愛し抜かれたことです。極みまで、つまりご自身の命をさしだしてまで、ご自身の命を十字架で犠牲にするまで、極みまで私たちを愛されたのです。

今日、扱う統一教会やそのいわば教祖の文鮮明と比べてみれば、まさに 180 度違うことがお分かりになるだろうと思います。私は、このイエスにおいてこそ真の宗教のあり方が示されていると信じています。ただし、この絶対性は、人間にとっては逆に猛毒のような危険性を持っていることに

もきちんと認識しなければならない、そう考えています。イエスさまは真理であり絶対ですが、それを信じる人間と人間によってつくられるキリスト教という一つの歴史的存在は、つねに間違いやすい者であり、事実、間違いを重ねて来たということを弁えることです。

(2) 宗教の定義

新政府は日本には、欧米の「Religion」の訳語にあたる言葉がなかったので宗教という言葉つくって、これにあてました。英語の Religion はラテン語の「religio」: レリジオから来ています。これは、re-legere リレゲレと言う動詞の変化形です。

・哲学者キケロ (BC106-143) は、re-legere を再び - 集める、読むという意味から、深く思考することと捉えました。宗教とは実に、深く、徹底的に思考する、熟慮するという知的な営みだということです。

・ラクタンティウス (Lactantius 250-325) は「re-ligare = リリガレ 再 - 縛る⇒再び結びつけること、つまり神と人とを結合させるものと捉えました。そして、この理解は、正に聖書の使信である「福音」に即していますから、古代の神学者のアウグスティヌスは Religion、宗教とは、人間と神を再びつなぐもの、つまり、キリスト教こそ宗教であると主張しました。こうして欧米で宗教と言えば、神と人とを再びつなぎ合わせることを、その再びつなぎ合わせてくださる救い主イエス・キリストを証しする聖書の宗教こそ正しく宗教であるという理解が確定されたのです。

しかし、私は牧師ですが、カルト宗教がはびこる日本において、初めに紹介したキケロの re-legere の理解、つまり、宗教とは深く思考することと捉えることだと言う理解はとても大切であると思います。本来、宗教とは深く、徹底的に思考する、熟慮するという知的な営みなのです。このような知的な営みであることを回避する宗教こそ、怪しい、危険な臭いがします。

(3) 無宗教と無神論

「鯛の頭も信心から」ということわざがあります。信仰心があれば鯛の頭ですら拝んでしまうという、いわば宗教や信仰心を揶揄する言葉だと思います。確かにそのような信心は宗教と呼んではならないと思います。

「宗教は民衆のアヘンである」という言葉もまた有名です。若干25歳のマルクスが哲学論文の中で語られた言葉が切り取られて人口に膾炙しています。共産主義はキリスト教や宗教を麻薬のように考え、信仰を否定し

ている、無神論者だと批判する言説が溢れているだろうと思います。キリスト教の世界から言えば、共産主義はアンチキリストという評価が大勢を占めているだろうと思います。私自身はカール・マルクスに対してはほとんど無知ですから深入りをしません。マルクスは無神論者であったのかどうか、この点はとても大切なことだと思っています。

世界の真ん中で、わたしは無神論ですと叫べば、どうなるでしょうか。大多数の人が、基本的に人間性のない危ない人と思われると思います。日本人の中では、別に大丈夫です。しかし、世界においては、精神的な事柄について、ちゃんと考えない人々、向き合わない人、今だけ、金だけ、自分だけというような生き方をして、恥じない人というイメージを持たれるだろうと思います。そもそも聖書の神を信じる人々、ユダヤ教、キリスト教そしてイスラームの宗教人口は世界人口 72 億の中で 41 億、6 割に上ります。11 億のヒンズー教などを入れればいわば大多数の人々が何らかの宗教を持っているのが現実です。カルヴァンと言う神学者は、神さまは人間に「宗教の種」を与えていらっしゃると言いました。それは、人間の現実を見ても明らかな事実だろうと思います。どれほど未開と言われる人々の間でも宗教的な行為がそこに伴っているからです。

しかし一方で、文化庁によれば、日本の宗教人口は 2 億人を越えています。つまり、一人の人が神社とお寺をなんの問題意識もなく掛け持ちしているからです。先年、お亡くなりになられた名古屋大学の憲法学者の森英樹先生がこのような言葉をのこしておられます。「宗教に対するいい加減さは、もの思うことへのいい加減さに通じる。このいい加減さは、物思うこと、つまり精神的自由を大切にはしない。いいかげんが、しばしば寛容を失ってしまうし、とんでもなくいいかげんな「教え」をカルト宗教にしてしまう。」わたしもまったく同感です。これは、日本人に与えられた最大級の宿題であると考えます。

しかし、私自身このいい加減さについては、ある意味で同情的です。何故、そのような考えがはびこってしまったのでしょうか。私は、日本人がすでに江戸時代からまじめな宗教に出会っていないからだと思っています。

II 国家の宗教政策

(1) 江戸幕府の宗教政策

そこで、今から江戸時代から今日に至るまでの国家の宗教政策を簡単に振り返ってみたいと思います。

江戸幕府の宗教政策を簡単に言えば、キリシタンを根絶するために仏教寺院を利用することでした。仏教寺院はひとえにキリスト教をこの国から追放させるための存在としたのです。幕府は 1612 年に禁教令を發布して、踏絵を踏ませることや密告を奨励してキリシタンを徹底的に弾圧しました。領民がキリシタンではないことを仏教寺院に請け負わせる「寺請制度」をつくります。こうしてすべての領民を強制的に「檀家」にしてしまったのです。確かに、これによって組織としての仏教寺院は日本全国津々浦々に存在し、経済的な地盤を固め、幕藩体制の中で安泰な存在となりました。しかし、まさに葬式仏教と揶揄されるように、人々を慰め、励ます宗教としての生命力を枯らして行ったのです。つまり、この政策は仏教のためにも悪しきものだったはずなのです。

いずれにしろ、キリシタンへの迫害の徹底性については、世界史上類例がありません。その一つが「類族」の定めです。類族とは、強制的に改宗させられたキリシタンのこと、転びキリシタンと呼ばれた人々の子孫のことです。何と、類族は、五代後まで、幕府の監視下に置かれ、葬儀も自由に営むことが許されませんでした。藩外に出ることさえかなわなかった。五代も遡るとなれば、類族になった人々は、日本人の半数にも及んだのではないかと思われます。権力に逆らえばどうなるのか、それを、人間の内心の自由、人間にとってもっとも大切な尊厳を幕府の宗教政策は、破壊し続けたわけです。こうして、令和の今に至るまで日本人の心の底に宗教に深入りすること、キリスト教に深入りすることを恐れさせているのだと思っています。これを本当に克服することが、現代のキリスト者、教会の課題であるとわたしは考えています。

何故、キリシタンをここまで迫害したのでしょうか。現代の風潮は、宣教師たちが自国の貿易の先兵となって、日本人と日本の経済を収奪しようという企みを信長や秀吉そして家康が見抜いたからだと言うものがあります。それをすべて否定することはできません。しかし、一部のことを取り上げてそれがすべてだと言うような言説はまことに不勉強のそしりをまぬかれないと思います。もしそれが真実ならば、宣教師たちを追放するだけで事足りるはずですが。何故、類族の制度までつくって行ったのでしょうか。それは、日本だけの問題ではないのです。世界史の中で、この事例は、あちこちで起こったのです。つまり、聖書の教え、キリスト教の中に、将軍やお殿様と言えども、神の御前には一人の、平等な人間に過ぎないという教えがあるからです。すべての権力を神の前に相対化させる力を、聖書の教えがもたらすからです。これを「抵抗権」と言います。将軍と言えども、

聖書の神とその教えに反することを強いるなら、抵抗しても良い、抵抗すべきであるという教えが聖書の中にあるからです。そして、16世紀の宗教改革者、私たち名古屋岩の上教会が属する改革派教会のルーツとなった神学者カルヴァンが抵抗権の思想をきちんと打ち立てたのです。これこそが教会と国家との関係性を正す、根本思想なのです。

秀吉は、キリシタンの少女たちが権力者の妾になることをいのちをかけて拒否したことをしらされたとき、心底、恐ろしい教えであると認めて、その日の内に禁教令を出したと言われています。つまり自分たちの政治を根本から脅かす可能性を認めたからです。権力者だからこそ見抜いたのです。実に、これは新約聖書の時代において、ローマ皇帝がキリスト者を迫害した論理とまったく同じなのです。

(2) 明治政府の宗教政策

次に、明治政府の宗教政策を顧みてみたいと思います。新政府は、日本を近代国家として構築するために大急ぎで欧米諸国の知識を吸収させるために1871年から73年夏まで「岩倉使節団」を派遣しました。彼らは行く先々で、キリスト教を禁教とし迫害している野蛮な国家、人権を尊重しない国家、信教の自由をないがしろにしている劣等な国家であると厳しい批判にさらされることとなります。同時に彼らは、キリスト教が欧米の国家と国民の精神的基軸となっていること、その圧倒的な力をまざまざと知ります。

彼らは、日本の仏教にはキリスト教に相当する力が全くないことを知っていました。そこで政府は、江戸幕府の寺院への優遇を180度転換します。1868年、「神仏分離令」を発令します。

そもそも江戸時代まで、日本人の宗教観は、神も仏も併せて信じるという、唯一の創造者なる生きた神を信じる聖書の立場から見れば、言わば、「いいかげんな宗教観」です。聖徳太子がああ有名な17条の憲法によって「和を以て貴しとなす」としたことに見事に表されたものです。確かに聖徳太子は仏教を国家の基軸に据えました。しかしその仏教は、和の精神にからめとられてしまいます。この和とは、聖書で言う平和とはまったく重なりません。和というのは人間どうし言い争わないで、声の大きい人に寄り添って行くというものです。しかし、聖書の平和は神が主人公です。神さまを脇において、偉い人間の大きな声を中心にして行こうということでは、まったくありません。和をもって貴しとなすのは、ビートたけしさんが言った「赤信号、皆で渡ればこわくない」式の行動のことです。多数

派に流されて行くこと、その多数派とは「寄らば大樹の陰」ということわざが示すものです。力のある人が多数派を形成するし、その多数派の中でこれを是とするあり方です。

ところが明治政府は、このあいまいさ、神も仏も信じる、というあり方を強制的に分けさせたのです。政府は、仏教側の仏が本体で神が仏の化身であるという「本地垂迹説」による「神仏習合」から神仏分離へと180度転換します。先ほどの1868年の神仏分離令によって政府からだけではなく一般市民からも「**廃仏毀釈**」の嵐が吹き荒れます。廃仏毀釈とは、仏教寺院への破壊運動です。神道分離令によって、寺社領は「**上知 あげち**」つまり、土地が没収されてしまいました。経済的特権を奪われた寺院は、**全国9万のお寺**は実に壊されて**半減**してしまっただけとされています。江戸時代の仏教寺院がどれほど江戸市民にも憎まれていたかが推し量られるだろうと思います。

こうして政府は神仏分離令を下支えにして、欧米列強の国家的土台、精神的支柱とされていたキリスト教に対し、言わば「**疑似キリスト教**」としての「**国家神道**」を構築しました。実に、日本帝国憲法の第一章天皇その第一條に万世一系の天皇という物語つまり神話が掲げられました。「**大日本帝國ハ萬世一系ノ天皇之ヲ統治ス**」まさしく**現人神の天皇教**です。私に言わせれば、大日本帝国とはカルト宗教国家でした。その教義の中心が「**国体**」に他ならないと考えます。今日の日本人の宗教観にこびりつき、言わば根っこになってしまった天皇教とは、明治政府によって作りあげられた**国策カルト宗教**に他なりません。そして、そのプランは既に、江戸後期の平田篤胤の「**復古神道**」の中にありました。天皇教は、聖書の神のように言わば絶対者を立てるのです。同時に、明治政府は、「**和魂洋才**」を進めます。欧米の魂であるキリスト教だけをそぎ落として、新たな「**和魂**」として作った天皇教によって穴埋めします。そして西洋の優れた科学技術、学問芸術を急ピッチで輸入します。わたしは、この天皇教のシステムもまた、キリスト教を日本的に再解釈したもの、和魂の現れであると見なしています。それが疑似キリスト教の意味です。

さて、疑似キリスト教という意味の一つに、「**一君万民**」の教えがあります。これは、吉田松陰たちによる、一人の君主のもとにすべての人間が平等となれるという教えです。確かに、天皇ひとりを中心にして士農工商の身分制度をなし崩し的に壊して行けたわけだと思えます。しかし、日本人が知っているいわゆる人間の尊厳、人権とは結局は、個人の尊厳ではないわけです。言わば、階級からの自由です。しかもそれは、天皇陛下の名の

もとに賜る自由です。言わば、制限がついています。天皇に反抗すればただちに存在が許されなくなってしまうものなのです。

こうして「現人神」としての天皇をまつりあげることによって、北海道のアイヌから琉球に至るまで、この国に生きるすべての人々を天皇の「赤子」つまり子どもとして、「臣民」つまり天皇の民とする自意識、信仰を植え付け、日本統一の教義的力を発揮していったのです。そして、その帰結こそ、実に、先の悲惨な敗戦に他なりません。

(3) GHQ の宗教政策

最後に、日本を統治することとなった GHQ の宗教政策です。敗戦の年の 12 月 15 日、「**神道指令**」を出します。これによって宗教つまり国家神道と政治の分離、国家による神道への援助の廃止、教育からの神道の除去、神祇院が廃止されました。つまり、GHQ は民主主義、法治主義、近代国家にとっての大前提、その土台が「**信教の自由、思想・信条の自由**」にあることを弁えていたのです。彼らは、キリスト教伝統、とりわけ宗教改革のキリスト教である私ども改革派教会の教えを基本にしたのです。改革派教会もまた、宗教改革時代にローマ・カトリック教会に迫害されてきた教会です。だからこそ気づかされ、徹底して大切にした聖書の教えであったのです。人間のまさに基本権利、まさにこれが人権なのです。日本人は、ついに「人権」とは何かを初めて、知らされて行くこととなります。

ちなみに、この信教の自由という基本的人権を現実化する方法が「**政教分離規定**」です。**政教分離原則**についてごく簡単に触れておきましょう。歴史上最初の明確な政教分離規定は、アメリカは 1791 年「**合衆国憲法修正十箇条**」を制定し、その修正第一条において成立したと言われています。「連邦議会は、国教の樹立を規定し、もしくは信教上の自由な行為を禁止する法律、また言論および出版の自由を制限し、または人民の平穩に集会をし、また苦痛事の救済に関し政府に対して請願する権利を侵す法律を制定することはできない」ことを定めました。こうして、国家神道は解体されました。国家が宗教を押し付けたり、宗教に介入したりすることを禁じるのが政教分離です。しばしば誤解されていると思うのですが、これは宗教が国家にかかわること、政治にかかわることを禁じるものではありません。そのような主張こそ、政教分離原則からの逸脱、違背です。

ここで一つのまとめをしてみたいと思います。廃仏毀釈の維新後の仏教界は、新政府にすり寄りその庇護を受けられるように従順な姿勢を強めて行きます。実に、私どもキリスト教会もまた同じ運命をたどりました。

つまり、「宗教報国」です。「寄らば大樹の陰」とばかりに、戦争推進の国策を宗教的に支えて行きました。国家の介入、国家による特別な庇護を受けた宗教団体がたどる道、それはあまりにも惨めなものとなるのではないのでしょうか。

およそ、いかなる宗教と宗教団体も、国家の庇護を受けることによってその経済的安泰、権力を持つと願うことは、宗教団体にとってはもとより人々にとっても、ただマイナスでしかない、そう考えます

私ども**日本キリスト改革派教会**は、敗戦後、まさに二度と戦争に協力する罪、神社参拝に敗北した偶像礼拝の罪を犯さないことを誓って、創立しました。名古屋岩の上教会もまた、まったく同じ罪の悔い改めをもって開拓伝道を始めました。そして、二度と同じ過ちを犯さないために、日本の教会の**戦争責任そして戦後責任**を担うことのできる自律した聖書的教会であり続けることを、まさに教会形成の柱として四半世紀歩んで参りました。

Ⅲ 統一教会とは何か

世界基督教統一神霊協会（Holy Spirit Association for the Unification of World Christianity 1954年）
教祖：文鮮明（ムン・ソンミョン・本名文龍明 次男 1920年～2012年）
1954年5月1日設立。1958年に日本に布教、1959年10月2日団体設立、1964年7月15日、宗教法人の認証を受けた。1982年の合同結婚式。

1960年3月16日、当時17歳の韓鶴子（ハン・ハクジャ）と結婚。この時期以降「合同結婚式」を開始。

1994年、教祖が統一教会の時代は終わったと宣言し教団名変更

➡**世界平和統一家庭連合**（Family Federation for World Peace and Unification; **FFWPU**）

なお、日本法人は、2015年教団名称変更認可（下村博文文科大臣の関与）。2012年教祖死去に伴い妻（三番目）、韓鶴子（ハン・ハクチャ）氏が総裁就任。（世界平和女性連合、宇宙平和連合総裁）。17歳のとき40歳であった文鮮明の伴侶として選ばれる。母親は統一教会の信者。文鮮明は当初、母親と懇意であったと言われている。

なお、現在、12人いると言われる子供たちは、骨肉の戦いを展開している。2020年5月8日、新しく「**天の父母様聖会**」を名乗る。統一教会の会館玄関に掲げられている写真を見ると「世界平和統一家庭連合」の上に、この文字が載せられています。今や、夫亡き後、韓鶴子が地上における神としての実権、主権を宣言したということであろう。

私は今回、初めて、統一教会の教義の根底となる「原理講論」を購入して

読み進めました。第一次資料を読まないでは、やはり、責任あるお話はできないと覚悟して、忍耐しつつ読み進めました。正直に申します。600頁の半分までで力尽きてしまいました。本当に気持ちが悪くなりました。長く統一教会の信者の救出に取り組んでいらっしゃる金沢教会の漆崎牧師にそのような印象についてメールしたら、こう返して下さいました。「吐き気が起こるのは健全な反応です」聖書を知っている人なら、正しく読むに堪えない「しろもの」なのです。

そもそも原理の著者は、聖書の神、つまり聖書の宗教の共通の大前提である創造者なる神をまったく知らないとしか言いようがありません。聖書の神は、天地万物を創造された絶対者であり超越者である全能の主権者でいらっしゃいます。ところが統一原理が考えたカミなるものは、聖書の神に言わばかすりもしません。教祖は聖書を利用しながら、聖書を不完全な書として批判します。旧約そして新約を越えるのは「成約」としての原理だと言うわけです。この原理こそ真理であると主張する論法です。実に、聖書の神と、イエス・キリストの働きは失敗であった。だからこそ、最後のメシアである教祖が神であり、救世主であるという論法です。自分を神と宣言することがどれほど聖書の宗教からの逸脱か、これは基本のきのことなのです。

原理とは、古代の中国で生まれた自然哲学思想である「陰陽道」をベースにしています。これが原理に宗教の装いをもたらします。さらに世界人口の6割がその信じる宗教の経典とする聖書を利用し、聖書を隠れ蓑にしたものです。

皆様の中でも万が一にもこの原理なる教義を発明した人は、やはりどこかすぐれた宗教的、哲学的思考を持っているのではないかと評価する方がいらっしゃるかもしれません。しかし、実はこの教えには、言わば「種本」があるのです。文鮮明が十代の頃、心酔した異端の盗作、剽窃なのです。

ちなみに、アメリカの下院外交委員会全国国際機構小委員会、いわゆるフレージャー委員会が統一教会の議会への不正工作を調査して、このように結論づけました。いわく、「聖書のセックス風解釈」です。なぜなら、この教義のベースは性交にあるからです。神に創造されたアダムとエバはエデンの園にいました。エバはそこでサタン、悪魔と性交をしたというのです。もとより聖書、創世記にそのようなことが記されているわけでは全くありません。この悪魔と性的関係をもったこと、原理はそれを罪と呼びます。これもキリスト教の原罪の教理とは無関係です。教祖は、全人類が性的墮落の罪を犯して、罪人、神の刑罰を受ける者になったが、メシアである自分の清い血と人類が統一すること、つまり、性的関係に入ることで救済されるというもので

す。そこに有名な合同結婚式が編み出されるわけです。原理講論の教え、教理の本質は「淫教」です。1980年の出版された「淫教のメシア文鮮明伝」荻原遼は、このカルト反社集団の本質を見事に抉り出しています。

統一教会の教え

α 「はじめての統一原理（文鮮明先生が解明した真理）」2014年光言社から引用します。

タイトルに【新しい真理—「統一原理」—】とあります。統一原理とは真理だということです。その真理の内容を六つ掲げてこのように記します。

① 「内外両面の無知を克服し、内外両面の知へと導く。」

内外両面の無知とは宗教という内的真理と科学という外的真理の二つは、これまで対立してきたが、この内外を統一し解決するのが新しい真理である統一原理と言います。

② 「神の実在とその心情を解明する。神が存在することだけでなく、神が人類に対してどのような心情を持っておられるかを解き明かす」

神の実在は、これまでの宗教が解明したが、教祖が神の心を解明すると言います。ここに決定的に、自分が神であるという宣言の根拠です。天地創造の冠である人間の創造を失敗した神の悲しみ、イエスが十字架で救済を成し遂げられなかった悲しみを強調し、憐れな力のない神を、教祖が救うという教えです。

③ 「唯心論と唯物論を統一する。民主主義と共産主義の対立を解決する。」

勝共連合をフロント組織にした教団は、反共ではなく共産主義に勝利する「勝共」という造語を造ったほど、自分を逮捕した共産党に対する強烈な憎悪があります。しかし、それは自分の利益（感情）を根拠にしているに過ぎません。なぜなら、北朝鮮でビジネスチャンスを得られれば金王朝とのかかわりを大切にしたからです。統一教会の究極目標は、韓半島の統一、北と南の統一です。彼らは、朝鮮民主主義人民共和国に繋がるルートに価値があることを悟ります。自民党が拉致問題解決を唱えることで選挙の勝利に貢献したことで、このルートを持つ自分たちがその政治権力の拡大に利用するので、彼らは決して民主主義を推進するのではなく、自分たちのもとにすべてを統一する、すべての利権を自分たちのものとするというものです。つまり、教団そのものが地上天国を構築するという教えです。

④ 「キリスト教をはじめとする宗教のさまざまな課題を解決する。」

世界最大のメジャー宗教であるキリスト教を隠れ蓑にして、さらには宗教

そのものを隠れ蓑にして教祖と統一教会をして全宗教を統一して、超宗教とするというとてもない主張です。

⑤ 「すべての主義、思想、宗教を統一する。宗教、民族、思想、主義などの対立を解決する」

4とかぶっていますが、教祖は正しく、究極の壮大なビジョンを描いて見せます。およそ普通の人間の精神であれば、おそらくこのようなことは言い出せないはずです。自分を見つめ、自分を知る哲学的内省を知る人は、謙虚にならざるを得ないはずだからです。自分の限界を弁えること、聖書で言えば「主なる神を畏れ敬うことは知恵初め、基本です。命の源」（詩編111：10、箴言14・27）聖書から言えば、まさに知恵や知識からはみ出た愚かな人間の典型と言わざるを得ません。

⑥ 「人類家族世界を実現する。すべての人類が神のもとで兄弟姉妹であり、一つの家族あることを実感を持って確信させる。」

すでにメディアで紹介されているとおり、「韓国はアダム国家で日本はエバ国家」という教義です。その意味は、エバは女性でアダムを誘惑した悪です。「日本は韓国を植民地として迷惑をかけた国」です。男性アダムである韓国は「迷惑をかけられた存在」なのです。ですから、「日本は韓国に償いをしなければならない」と言うのです。それは、日本を資金集め、悪徳、靈感商法や献金の本拠となるのです。文鮮明は「天聖經」のなかでこう言いました。「韓半島は何かといえば、男でいえば生殖器です。半島です。島国は女性の陰部と同じです。日本が1978年から世界的な経済大国として登場したのはエバ（イブ）国家として選ばれたので（中略）日本はすべての物資を收拾して 本来の夫であるアダム国家韓国に捧げなければならないのです」

私は、この教祖は、まさに宗教とは無縁の人、徹底的に世俗の人、欲望の塊、欲望を最大化した人だと思われてなりません。この原理の教義も、人類救済、世界の統一云々と言いますが、それはただ一つの目的を達成するための理論武装だと思います。強烈なマインドコントロールを可能にし継続させるためのまさに「悪知恵」だと思います。つまり、教祖の性的欲望を最大化すること。経済的豊かさ、ビジネスを最大化すること、そして最後に自分たちの権力欲を最大化させることです。

最後に、自民党憲法草案と統一教会の改憲案は瓜二つです。いったいどちらが鶏で卵なのか分からないほどです。私は、自民党がカルト政治謀略集団

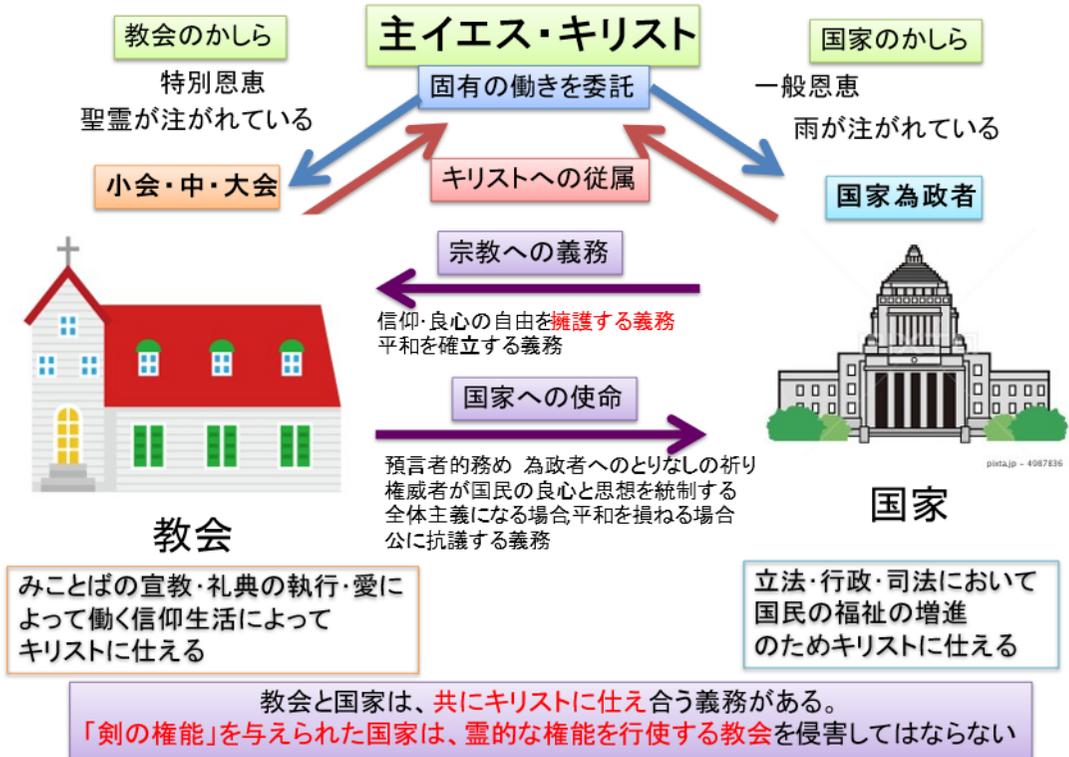
に焚きつけられたというのが真実のような気さえ致します。しかも、冒頭で申しましたが、これらはまた、すべて日本会議の主張とも重なるのです。実に、自民党とは、日本会議、統一教会そして創価学会のアシストなしに政権与党の座にい続けられない政党と言わざるを得ないのではないのでしょうか。この現実を市民が見抜くこと、大切なことではないのでしょうか。

統一教会の問題の結論として、私は、ジャーナリストでいらっしゃる鈴木エイトさんの著書、「**自民党の統一教会汚染 追跡 3000 日**」の結びの言葉に心の底から同意しています。「信者の人権を無視してその人生を奪う教団も問題だが、その信者を私利私欲のために使い捨てにする政治家はさらに問題視されるべきだ」

あの銃撃事件から日本の戦後政治の闇、とりわけ安倍政治の最も深い闇がついに暴かれ始めました。最後に聖書の御言葉を読んで終わりたいと思います。聖書の冒頭に記された決定的な神と神の民の勝利の宣言であります。

「地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。」神はいかにこの世界が破局的に混沌な状況に陥ったとしても、一言、光よあれと宣言して、闇を追い払って下さいます。どんなに闇が深くても、神さまとその光の前にはかわいい夜、落ち着いた夜にしてしまわれるのです。ただし、神はそこで私たちに呼びかけられます。あなたは世の光ですよ。だから、あなた方は手を緩めずに闇の支配を終わらせなさい。教会の務めは、この悪しき世界の現実に向かって、それは黒ですよ。ダメですよと神の言葉をもって指摘し、警告することです。また、反社会的カルト集団の犠牲になっていらっしゃる方々のためによき隣人となって共に生きることです。ここにお集まり下さった皆様とともに、宗教や思想の違いを乗り越えて、よりよい社会を築くために連帯してまいりたいと願ってやみません。

おわり



主な参考図書

「原理講論（重要度三色分け）」	世界平和統一家庭連合	1996年	光言社
「はじめての統一原理（文鮮明先生が解明した真理）」		2014年	光言社
「淫教のメシア文鮮明伝」	荻原遼	1980年	晩聲社
「自立への苦闘 統一協会を脱会して」			
	全国統一協会被害者家族の会編	2005年	教文館
「自民党の統一教会汚染 追跡 3000日」	鈴木エイト	2022年	小学館
「統一協会＝勝共連合とは何か」	日隈威徳	2022年	新日本出版社
「統一協会信者を救え 杉本牧師の証言」		1993年	緑風出版
「文芸春秋 統一教会と創価学会」（文鮮明は母をレイプした）		22年10月号	
「統一教会からまことのメシヤへ 原理講論のまちがいとたす」			
	森山諭編著	1986年	ニューライフ出版社
「霊と金 スピリチュアルビジネスの構造」	櫻井義秀	2009年	新潮新書
「仏教の大東亜戦争」	鶴飼秀徳	2022年	文春新書
「ウクライナ侵攻とロシア正教会」	角茂樹	2022年	カワデ夢新書
「異端とは何か」	井出定治	1988年	いのちのことば社